

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 25 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520394

研究課題名(和文)新概念「亡命の文化テキスト」の確立ー東アジアへの亡命研究を通して

研究課題名(英文) Cultural Anthropological Aspects of The Forced Travels - Exile to and through East Asia during World War II

研究代表者

Pekar Thomas (Pekar, Thomas)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70337905

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：a) 第二次世界大戦中に東アジアへ亡命したユダヤ人の文献目録作成のため、文書館等にて資料収集を行い、前段階の研究を2011年に出版した。これに関連し、戦中の日本のユダヤ人に対する見解について分析した。b) 文学研究・文化理論の観点では、「ハイブリッド性」と「超文化性」の概念について議論した。これまでの二分化された研究視点に対し、今日では異質なものが文化の要素と見なされ、亡命・移民文学はもはや文化的にマージナルな現象ではない。c) 東アジアへの亡命テキストを文化的革新性という観点からポジティブに読み、「亡命の文化テキスト」として描き出した。

研究成果の概要(英文)：a) A material base for a future Bio-Bibliography of European Jewish exile in East Asia during World War II was created by collections of materials in archives and libraries. A preliminary study was published in 2011. Related to this, I have also concentrated on exploring the Japanese attitudes towards the Jews during World War II. b) In the field of literary- and cultural-theoretical methodologies, key concepts discussions in cultural-studies such as 'hybridity' and 'transculturality' are included. Contrary to older dichotomic research approaches, heterogeneous elements are currently considered as intrinsic cultural elements, so that texts of exile or migration are now no longer cultural edge or outer phenomena. c) With regard to texts of East Asian exile, it was demonstrated that these texts can be read in a 'positive' way, i.e. in terms of their abilities of cultural renewal. From this point of view, these texts were described as 'Cultural texts of exile'.

研究分野：人文学

キーワード：亡命 亡命文学 異文化研究 文化接触研究 文化テキスト 移住 移民文学 超文化研究

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語を母語とする人々のヨーロッパ諸国やアメリカへの亡命に関しては、多くの目録が作られ、分類され、証言や文学的テキストなどの資料が保管されているのに対し、東アジアへの亡命に関しては実証的な研究が不足していた。例えば、上海への亡命に関してはいくらか研究が進んでいたものの、日本への亡命に関してはほとんど体系的な研究がなかったと言える。そのため、以下の3つの領域での研究発展の必要があった。

a) 亡命研究

まず、世界各地の図書館や文書館で資料収集を行い、研究の基盤となる関連資料の文献目録を作成する必要があった。この文献目録は東アジアへ亡命したすべての亡命者をその文献と共に記録すること、誰がいつからいつまでどこにいたのか、その人物の亡命についてどのような証言(出版物)があるのか、という問いに答えることを目的としていた。

b) ホロコースト研究・反ユダヤ主義研究

ドイツでは反ユダヤ主義研究とも呼ばれ、しばしばジェノサイド研究と関連付けられているアメリカで生じたホロコースト研究は、ホロコーストをナチズムの支配の時代やドイツ国内に限定される問題としてではなく、その前史から続く複雑な文化的出来事として捉えている。それ故、とりわけユダヤ人の東アジアへの亡命に関する研究にとって、東アジアが、その中でも特に日本がユダヤ人に対してどのような見解を持っていたのかは重要なテーマである。1920年代以降、日本には反ユダヤ主義およびユダヤ人鼻疽の結合が見られるため、プロジェクト内でこのテーマも扱う必要があった。

c) 文化研究

今日の文化研究の本質的なテーマは異文化関係、文化の重なり、「ハイブリッド性」という概念でしばしば表される混合である。この「ハイブリッド性」は、「新しい」文化的産物を生み出す限り、たいていポジティブな現象として見なされる。亡命者や移住者の「ハイブリッドなアイデンティティ」という概念も、複数の文化に対応することができるなどの行動能力、二言語または複数言語を話すことができる言語能力、創造的な言語拡張などの創造性という点でポジティブに見なされる。これに関連して、東アジアへの亡命におけるポジティブな側面を指摘することが本プロジェクトの課題でもあった。それは、上海における文化生活の組織や、膨大な亡命文学というような、亡命者による特定の文化的産物から成る側面である。この産物の研究のために、概念「亡命の文化テキスト」を用いる必要があった。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、以下の3点が本プロジェクトの主要な目的となった。

a) 東アジアにおける亡命に関する文献目録作成のための資料収集

上記の通り、本プロジェクトの根本的な目的は、図書館や文書館での資料収集を通し、文献目録作成のベースとなる資料を入手することであった。

b) 東アジアへの亡命のモデルとなる特徴

第一に、1933年から1945年にかけて、ヨーロッパ諸国から東アジア(中国並びに日本)に亡命したユダヤ人、また政治的亡命者の特殊な例を取り上げ、亡命経験の克服の可能性について描出し、可能な限り分類することが課題であった。本研究の出発点は、この亡命体験の例を、他の亡命者の体験や特に今日の国際的な移民の体験にも適用可能な一つのモデルへと発展させられないかという問いであった。その際、亡命と移民の移住には緊密な関係があり、双方の現象には共通の文化人類学的ベースが結論できると仮定した。

c) 亡命および移民研究のための始点としての「文化テキスト」

共通の観点から亡命および移民研究を進めるための始点は、本研究が提唱する概念「文化テキスト」である。本概念は、民俗学並びに文化人類学の基礎研究(ルート・ベネディクト、クラウデ・レヴィ=シュトラウス、ジェームス・クリフォード、クリフォード・ギーツら)に関連づけて定義されている。これらの研究はとりわけ、文化的世界の描出の不可能性と可能性について論じ、その描出の文化的方法について主張している。亡命の「文化テキスト」は亡命経験および移民の移住経験の克服方法すべてを指している。すなわち、亡命および移住という特殊な状況から生み出された文章、絵画、演劇作品、写真、映画などの基本的な視覚メディアである。本プロジェクトでは特にテキスト的(文学的)メディアに重点を置いた。

亡命と移民の移住に関して文化人類学的に共通するベースは、「文化テキスト」の観点からは以下の点に見出される:これらのテキストが亡命または移民の移住という特殊な状況の表現であること、また、亡命者/移民は望むと望まざると関わらず、少なくとも故郷の文化と新しい文化の二つまたはそれ以上の文化の間で生活していること、そして、たいていは移住先の未知の新しい文化に適応するために、亡命者/移民は特定のストラテジーを発展させなければならない。このストラテジーは移住先との完全な同化という極、完全な拒絶という極の二つの間を揺れ動いており、しばしば、この二つの極の間を選び取るようとしている。一例は、故郷の文化を保持しつつ部分的に同化することであり、これはある意味、「ハイブリッド化」と呼ぶことのできるものである。本プロジェクトが仮定していたのは、複数の文化が同時に現れるということの中に亡命および移民の文化テキストの本質的次元があるということだ

った。すなわち、故郷の文化と移住先の文化、そして場合によっては、亡命者/移民が移住先の文化に行きつくまでに横断したトランス文化が同時に現れると仮定していた。

3. 研究の方法

以上の目的に達するため、以下の研究方法を用いた。

a) 資料収集の面では、特に具体的なケースの分析を通して歴史学的研究を広げるため、東アジアへの亡命経験に関する信頼に足る報告が収集された。

b) 亡命および移民経験に関して、東アジアへの亡命のモデルとなる特徴を明確にするため、特にゲルハルト・ノイマン、ジークリット・ヴァイゲル、ドリス・バツハマン＝メディックに代表される文化学的、文化人類学的手法を用いた。この観点から文学テキストも一般的な文化的表現形式、本研究のケースでは東アジアへの亡命の文化的表現形式として捉えられる。

c) 文化学的、文化人類学的観点から「亡命の文化テキスト」を分析する点に関しては、以下の3点について分析を行った。

1. テキストと故郷の文化に対する関係(「故郷」のテーマ化など)または亡命や移住を決定づけたトラウマ的経験や出来事に対する関係。

2. テキストと受け入れ先の文化との関係(適応のテーマ化)

3. テキストと故郷の文化並びに受け入れ先の文化の要素が結びつくことによって生じるハイブリッドな第三領域との関係

4. 研究成果

a) 資料収集

ベルリンの反ユダヤ主義研究図書館、亡命雑誌 Gelbe Post を閲覧できる上海の文書館、並びにウィーン、ロンドンの図書館などにおける詳細な文献研究を通し、東アジアへの亡命文献目録を作成するために広範囲に渡る資料を収集することができた。この文献目録を作成するには、まだしばらくの時間を要する。前段階の研究としては、前科研プロジェクトによって 2010 年に開催された国際シンポジウムの成果をまとめた著書 „Flucht und Rettung. Exil im japanischen Herrschaftsbereich (1933-1945)“ (2011 年出版) が挙げられる。

b) 概念「文化テキスト」の理論的土台

本研究では、文化接触研究に基づいて「文化テキスト」という概念を超文化的現象としてより正確に定義するために研究を進めてきた。これまでの先行研究においては「異質なもの」と「自分のもの」という二分化が見られたが、今日ではヴォルフガング・ヴェルシュら超文化理論家が述べている通り、文化そのものが異種なものとして理解されてい

る。つまり、「異質性」は外部からくる現象としてではなく、ひとつの文化の根本的なコードにあるもの、そこにすでに置かれているものとして捉えられている。移民文学が文化的活動に携わっている限り、この自分の文化における異質な瞬間というものは、移民文学に新しい文化的意味と価値を与えるためにベースとなる。

c) 「亡命の文化テキスト」の具体的検証

とりわけ、2012 年にアムステルダムで開催された亡命研究会における口頭発表「移民と亡命の文学」において、膨大な移民文学の構成要素を理解するため、亡命テキスト分析の文化学的発展を試みた。包括的に、亡命テキストと移民文学には、亡命や移住を克服する次の 3 つの典型的な方法が見られる。

1. 亡命者/移住者が故郷の文化を離れたにも関わらず、それを保持したり、保持しようと試みること。

2. 特に言語の問題で見られるように、受け入れ先の文化に同化しようとする試み。

3. ハイブリッドな領域を作り出す試み。すなわち、持続的な移住の状況にアイデンティティを持つとすること。

これらの移民文学に典型的な根本的かつ文化学的行動様式について、様々な文学的事例を提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

Thomas Pekar, Der Tod, die Technik und das Kollektiv. Ueberlegungen zu Bertolt Brechts Radiolehrstueck „Der Ozeanflug“, 学習院大学ドイツ文学会 研究論集, 19 号, 2015, p.49-73.

Thomas Pekar, Ueber die Erzeugung kultureller Textualitaet. Am Beispiel Japan, in: Christian Baier/Nina Bernkert/Hans-Joachim Schott (Hg.): Die Textualitaet der Kultur. Gegenstaende, Methoden, Probleme der kultur- und literaturwissenschaftlichen Forschung, Bamberg: University of Bamberg Press 2014 (Bamberger Studien zu Literatur, Kultur und Medien. Bd. 10), p. 205-222.

Thomas Pekar, Reisen, in: Ernst Juenger Handbuch. Leben – Werk – Wirkung, hg. von Matthias Schoenig, Stuttgart/Weimar: Metzler 2014, p.244-347.

Thomas Pekar, Narrative des Klimawandels, 学習院大学ドイツ文学会 研究論集, 17 号, 2013, p.45-56.

Thomas Pekar, Ernst Juengers spaete Reisen, in: Essays in Honour of Professor Josef Fuernkaes. The Geibun Kenkyu. Journal of Arts and Letters, Band 105, 2013, p.133-158.

Thomas Pekar, Migrationsliteratur. Versuch einer begrifflichen Klaerung. 学習院大学ドイツ文学会 研究論集, 16号, 2012, p.33-46.

Thomas Pekar, Von der Modernisierungs- zur Interkulturalitaetswissenschaft. Stationen der geschichtlichen Entwicklung der Germanistik in Japan. KulturPoetik. Zeitschrift fuer kulturgeschichtliche Literaturwissenschaft, Band 11, 2011, p.61-75.

Thomas Pekar, L'histoire et l'evolution des etudes germaniques comme discipline au Japon depuis 1945. Allemagne d'aujourd'hui. Revue d'information et de recherche sur l'Allemagne, Band 195, 2011, p.141-151.

Thomas Pekar, The Russian Protocols of Zion in Japan: Yudayaka/Jewish Peril Propaganda and Debates in the 1920s. Holocaust and Genocide Studies, Band 25, 2011, p.459-461.

[学会発表](計11件)

Thomas Pekar, Heimat, Anpassung und Transit in der Literatur des Exils *und* der Migration. Internationalen Tagung der Gesellschaft fuer interkulturelle Germanistik, 2014年5月29日-31日, アイルランド

Thomas Pekar, Die Bushidō-Rezeption im nationalsozialistischen Deutschland. Kriegshelden und Heldenmythen in Deutschland, Frankreich und Japan, 2014年5月8日-10日, ベルリン

Thomas Pekar, Die Bereitstellung der ökonomischen Basis für Exil und Emigration in Ostasien durch jüdische Hilfsorganisationen. Jahrestagung der Gesellschaft für Exilforschung, 2014年3月28日-30日, ウィーン

Thomas Pekar, Japanische „Selbstvorstellungsdiskurse“ in westlichen Sprachen nach Öffnung Japans. 「文化の判読可能性の限界 文化接触モデル (Grenzuen der Lesbarkeit von Kulturen.

Kulturkontakt-Modelle)」, 2013年9月14日-15日, 学習院大学

Thomas Pekar, Uwe Wirth, Rahmen und Rahmenbrueche. Leitende Organisation des 55. Kulturseminar (招待講演), 2013年3月24日-30日, 蓼科

Thomas Pekar, Die Psychoanalyse im ostasiatischen Exil. Adolf Josef Storfer und sein Zeitschriftenprojekt „Gelbe Post“. Exilforschung zu Oesterreich, Leistungen, Defizite & Perspektiven, Tagung der oesterreichischen Gesellschaft fuer Exilforschung (OeGE), 2013年3月12日-14日, ウィーン

Thomas Pekar, Ueber die Erziehung kultureller Textualitaet. Am Beispiel in Japan. Die Textualitaet der Kultur. Gegenstaende, Methoden und Probleme der kulturmedienwissenschaftlichen Forschung, 2012年6月29日-7月1日, バンベルク

Thomas Pekar, Transkulturalitaets-
texte: Exil- und Migrationsliteratur. Quo vadis, Exilforschung? Stand und Perspektiven. Die Herausforderung der Globalisierung, 2012年3月23日-25日, アムステルダム

Thomas Pekar, Flucht und Rettung. Exil im japanischen Herrschaftsbereich 1933-1945. Deutsch-Japanischen Gesellschaft Berlin e.V., 2012年3月20日, ベルリン

Thomas Pekar, Ortslektorinnen und Ortslektoren - eine Bruecke zu Deutsch an Hochschulen im Ausland. In der Ferne zuhause - mit Deutschland vernetzt, 2011年9月9日-12日, ボン

Thomas Pekar, Kleine Einführung in die Migrationsliteratur. Migration und Integration in Deutschland, 2011年7月25日-29日, ベルリン

[図書](計2件)

Thomas Pekar (編), Flucht und Rettung. Exil im japanischen Herrschaftsbereich (1933-1945). Berlin, 2011.

Thomas Pekar, Yuich Kimura (編): Kulturkontakte. Szenen und Modelle in deutsch-japanischen Kontexten, Bielefeld, 2015 (= Edition Kulturwissenschaft, Bd. 43).

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

トーマス・ペーカー (PEKAR, Thomas)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：70337905

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：